

平成 18 年に開催した第 6 回天理スポーツ・ギャラリー展「武道 輝かしい伝統・希望の未来」において相撲も紹介したが、諸般の都合により、写真の掲載のみの展示にとどまっていた。当時、歴史のある相撲部について、いつかきちんとした形で紹介しようと考えていた。そこで、本シリーズ二つめのテーマとして「相撲」を取り上げることとした。今回は概要を記し、次号よりエピソードを交えた詳細を紹介していく予定である。

天理における相撲部としての記述は、『天理中学校三十年史』に残っている。部として独立しているわけではないが、大正 10 年に天理中学校の大運動会において、教対天理中学校の角力紅白試合が催され、素晴らしい人気を呼んだとある。以降さまざまな大会に出場していたようであるが、正式に部として承認されたのは大正 15 年になってからである。

天理高校第二部相撲部は第二次世界大戦後、敗戦による混沌とした時代の中で、戦前の天理中学校からの伝統を受け継ぎ、いち早く再発足している。発足の当初は農事部の中にある部として始まったようである。当時は食料難、物資不足であり、成長期の生徒たちにとって毎日が飢えとの闘いでもあった。そのような環境の中、相撲部の部員勧誘の決まり文句は「相撲部に入ったらおかゆが腹一杯食べれるぞ」であった。

昭和 21 年、農事部主任であった市原定七先生と農事部所属生徒を中心に相撲部らしきものができたようである。土俵も顧問、部員の手によって西南寮の中に作られた。以後、土俵の場所は転々とする。昭和 22 年、奈良県中等学校体育大会に出場し、優勝。翌 23 年 4 月、新制天理高等学校第二部第 1 回入学式が挙行された。この年、近畿大会に出場する。また、第 3 回国民体育大会に 3 名の選手が出場した。

昭和 25 年には二代真柱様を奈良県体育協会会長に迎え、第 1 回県民体育大会が盛大に行われた。相撲部は団体 3 位、個人総合優勝という好成績を残す。以後、数年は国体や近畿大会、全国大会に出場するなど大いに活躍をする。毎日の練習は昼間の農作業を終えてからの練習で非常に大変であったが、練習後のおかゆやおやつを楽しみにがんばった者も多くいたようである。

昭和 44 年に土俵を学校内に移転することが決定。翌 45 年に農事部土木班の手により待望の新土俵が完成した。6 月に三代真柱様をお迎えし、大相撲の伊勢ヶ浜部屋の清国、照桜閣一行を招いての盛大な土俵開きが催された。これまで農事部生が主



昭和 24 年当時の部員たち

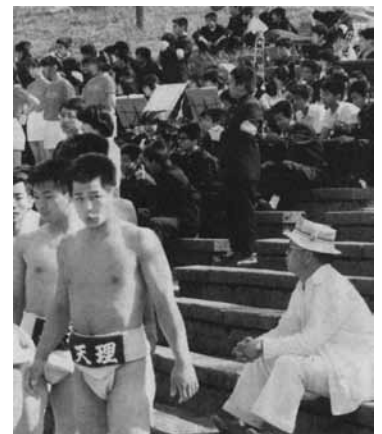
体の相撲部となっていたが、これを機に、さらに学内の生徒も入部。昭和 51 年には別館南側に新土俵が完成する。三代真柱様と、大阪場所を終えた青葉山関はじめ、木瀬部屋の力士 5 人を迎えて、土俵開きが催



新入生歓迎相撲 昭和 33 年 4 月 西南寮内相撲場

された。おぢば在住の OB とともに、プロの力士と汗を流したことは、当時の部員にとって生涯の思い出となったようである。

翌 52 年にはインターハイ（全国高等学校総合体育大会）奈良県予選に優勝し、インターハイに出場。しかしながら翌年以降、部員数が徐々に減少し、部の成績としても低迷期に入るが、昭和 61 年に本格的な新土



第 71 回全国高校金沢大会に出場 昭和 62 年 5 月

俵が完成。東西礼拝場ふしんの御用材をいただき、農事部生がカンナの刃の研ぎ方から始めて、棟梁の指導のもと、すべて生徒の手で造営された。

教祖百年祭の祭典期間中に上棟式、4 月には三代真柱様をお迎えして盛大な土俵開きが催された。新土俵の完成を契機に、新入部員が増え、練習にも熱が入るようになった。この年、高等学校金沢大会奈良県予選に優勝し、悲願であった全国大会への出場権を手にした。さらにインターハイには団体は出場を逸したものの、個人で出場を果たした。

翌 62 年にも全国大会へ出場をする。以降、インターハイ等に出場はするものの、部員数が徐々に減少。平成 7 年には 2 年生 4 人のみのチームでインターハイに出場を果たしたが、翌 8 年に、ついに部員数が 0 となった。平成 9 年にも入部者はなく、平成 10 年から休部となっている。

次号より相撲部の詳細な足跡を時代をおって紹介していく予定である。

[参考文献]

- 『荒木』第 31 号、天理高等学校第二部発行、昭和 36 年 2 月。
『天理高等学校百年史』第二部編、天理中学校・天理高等学校
創立百周年記念事業実行委員会、平成 20 年 9 月。
『天理中学校三十年史』天理中学校発行、昭和 5 年 4 月。